

偶 感

湯川秀樹氏が、このごろ朝日新聞に「旅人」と題する自叙伝のようなものを連載している。それには「一物理学者の回想」という副題がついている。私は、ひとりの秀抜な世界的科学者が、どのような家庭に生まれ、どのように育てられてきたかに、多大の興味をもって愛読している。そういう内容ばかりでなく、湯川さんの文章そのものも、回を追うて読ませる力もっているようである。平明達意の文でありながら、どこかに詩情をたたえている。私は平素から、湯川さんの書く文章を、一種の美文だと思っている。専門の方面のことは知らないが、新聞や雑誌に発表される一般向きのものについていっても、たしかにそういえると思う。湯川さんのそういう才能は、どこからきているのだろう。才能というからには、生得のものといえるかも知れないが、いくら両親から良質を享けても、それがある適当な時期に養われなければ、伸びないままで終わるのであろう。「旅人」を読みながら、そのことに気づくところが何箇所かある。そのひとつに、湯

川さんが、幼時祖父君から習った漢籍の素読のことがある。

湯川さんは、こんなふうに回想している。「……私はこのころの漢籍の素読を、決してむだだったとは思わない。戦後の日本には、当用漢字というものが生れた。子供の頭脳の負担を軽くするには、たしかに有効であり、必要でもあろう。漢字をたくさんおぼえるための努力を他へ向ければ、それだけプラスになるにちがいない。しかし私の場合は、意味も分らずに入ってしまった漢籍が、大きな収穫をもたらしている。その後、大人の書物をよみ出す時に、文字に対する抵抗は全くなかった。漢字に慣れていたからであらう。慣れるということは怖ろしいことだ。ただ、祖父の声につれて復唱するだけで、知らず知らず漢字に親しみ、その後の読書を容易としてくれたのは事実である。」

私は、湯川さんの文章をだしに使って、素読の復活など主張しようとするのではない。ほんとうの教育は、案外無意識のうちに行なわれていること、そして将来あらわれる大きな効果ほど、それまでに時間がかかるものだとということ、こんなことを、このごろ考えさせられている。

(昭和三十三年四月)